九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

メタフォリカル・コンピテンス（MC）研究の現状と問題点及び日本語教育への導入

鐘，勇
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程

井上，奈良彦
九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門 ： 教授 ： 言語教育学

https://doi.org/10.15017/21799

出版情報：言語文化論究. 28, pp.73-86, 2012-03-02. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

メタフォリカル・コンピテンス（MC）研究の現状と問題点及び日本語教育への導入

鐘　　勇・井 上 奈良彦

九州大学大学院言語文化研究院　言語文化論究　第28号　平成24年2月発行　抜刷

Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
Motooka, Fukuoka, Japan

STUDIES IN LANGUAGES AND CULTURES, No.28, February 2012

メタフォリカル・コンピテンス（MC）研究の現状と問題点及び日本語教育への導入[i]

鐘　　勇[ii]・井 上 奈良彦[iii]

要　旨

概念メタファー理論の発展にともない、外国語学習者のメタフォリカル・コンピテンス（MC）が重要視されつつあり、第二言語習得に欠かせないものとなってきた。しかし、日本語教育では、MCに関する研究はまだ見られない。本稿では、これまでのMCに関する文献を収集し、MC研究の現状と問題点についてまとめたうえで、日本語教育へのMC研究の導入の構想を提案する。

キーワード：
概念メタファー、メタフォリカル・コンピテンス（MC）、第二言語習得、日本語教育

1．はじめに

外国語教育における認知言語学的アプローチは英語習得・教育を皮切りに始められたが、今日では日本語習得・教育の分野にも及んでいる（森山 2007）。とはいえ、認知言語学の重要な一分野である概念メタファー理論に関する研究成果はまだあまり日本語教育に応用されていない。また、近年重要視されつつある外国語学習者のメタフォリカル・コンピテンス（Metaphoric Competence、以降MC）に関する研究も、日本語教育ではまだ見られない。

本稿では、応用認知言語学の潮流を踏まえ、様々な先行研究を収集、分析することによりこれまでのMC研究の現状や問題点をまとめながら、日本語教育への導入を提案したい。

2．概念メタファー理論

従来の研究では、メタファーとは、「2つの事物・概念の何らかの類似性（similarity）に基づいて、本来は一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩」を指していた（籾山 2010: 35）。例えば、「君の瞳はダイヤモンドだ」というメタファーについては、瞳とダイヤモンドは「光る」という共通点を持つため、瞳をダイヤモンドに喩えられるわけである。

しかし、Lakoff & Johnson（1980）の *Metaphors We Live By* は、メタファーのイメージを一変させた。彼らは、「メタファーの本質はある事柄を他の事柄を通して理解し経験することだ」（Lakoff & Johnson 1980/1986: 6）[1]と解釈し、「概念メタファー理論」を提唱した。それによると、人間の概

---

[i] 本論文は言語処理学会第17回年次大会（2011年3月9日、豊橋科学技術大学）において鐘勇・李相穆が口頭発表した原稿に加筆修正したものである。

[ii] 九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程在籍。
[iii] 九州大学大学院言語文化研究院教授。

念体系は根本的にメタファーによって構造を与えられ、規定されている。概念体系の中に概念レベルのメタファーが存在しているからこそ、言語レベルのメタファー表現が可能である。例えば、我々の概念体系には次の ARGUMENT IS WAR（議論は戦争である）という概念メタファーが存在している。

ARGUMENT IS WAR（議論は戦争である）
a. Your claims are indefensible.（あなたの主張は守りようがない。）
b. He attacked every weak point in my argument.（彼は、私の議論の弱点をすべて攻撃した。）
c. You disagree? Okay, shoot!（反対か？分かった、撃ってみろ！）
（Lakoff & Johnson 1980: 4, 谷口 2003: 13, 下線は筆者）

我々は普段、“indefensible”、“attacked”、“shoot” などの戦争に関する言葉を用いて議論について語っている。即ち、我々は議論を戦争を通して経験し、ARGUMENT IS WAR という概念メタファーに基づき、上記の a、b、c のメタファー表現を無意識に理解、産出している。

その後、Lakoff（1987）、Johnson（1987）、Lakoff（1993）及び Lakoff & Johnson（1999）では、概念メタファーに基づいた「メタファー写像理論」が提案され、精緻化され、写像を基本とした現代のメタファー理論が発展してきた。メタファー写像からみる概念メタファーとは、起点領域（source domain）から目標領域（target domain）への写像であり、写像される対象の主要なものがイメージ・スキーマである（谷口 2003: 45-53）。例えば、LOVE IS A JOURNEY（恋愛は旅である）という概念メタファーについては、次のように解釈できる。

LOVE IS A JOURNEY（恋愛は旅である）
起点領域：　空間（移動）
目標領域：　恋愛
イメージ・スキーマ：「起点 - 経路 - 終点」のイメージ・スキーマ
（谷口 2003: 53）

我々は、起点領域である空間移動の「起点」、「経路」、「終点」を、それぞれ恋愛の「出会い」、「過程」、「結婚」といった部分に写像させるのである。

3．MC 研究の現状

概念メタファー理論の発展にともない、メタフォリカル・コンピテンス（MC）に関する研究が盛んになってきた。本節では、これまでの MC 研究を概観する。

3．1．MC の定義

最も早くからメタフォリカル・コンピテンス（MC）という言葉を使った研究としては、Gardener & Winner（1978）、Pollio & Pickens（1980）及び Pollio & Smith（1980）が挙げられる。彼らの研究では MC は概ね、子供のメタファー表現への理解力、メタファー表現の有効性についての説明力、新しいメタファー表現の産出力、更に、新しいメタファー表現の使用嗜好などを指していた。

その後、Trosborg（1985）は、はじめて第二言語学習者を対象に MC 発達について測定し、MC という概念を第二言語習得の分野に導入することを試みた。彼女は、学習者の MC は新しいメタ

ファー表現のみならず、慣例的なメタファー表現の産出力をも含めるべきだ、と主張している。続いて、Danesi（1992）も、第二言語習得の視点から、文法能力とコミュニケーション能力と平行し、MC という概念を提唱している。同氏（1992）によると、MC は主にメタファー表現の理解力と産出力に反映されている。

また近年、Littlemore（2001）は先行研究の分析から、MC は次の 4 つの要素から構成されるとまとめている。(1) オリジナルなメタファー表現の産出力、(2) メタファー表現を理解する際の熟練度、(3) メタファー的な意味の識別力、(4) メタファー的な意味を識別する速度、である。Azuma（2004）と Hashemian & Nezhad（2006）も、MC は目標言語の中のメタファー表現を理解、運用する能力である、と述べている。その後、東（2006）では、MC の定義として、(1) メタファー表現を認識する力、(2) メタファー表現を理解し運用する力、(3) メタファー表現を味わえる力を掲げている。更に、王（2007: 495）は、MC とは認知主体に普遍的に存在している異なる概念領域間の類比関係を識別、理解、更に、創造する能力であり、受動的にメタファー表現を理解、習得する能力のみならず、創造的にメタファー表現を運用する能力も、更に豊富な想像力及び創造力も含まれる、と主張している。

このように、MC の定義は様々であるが、その殆どはメタファー表現の識別力、理解力及び産出力という 3 つの要素に焦点を当てている。

３．２．MC の重要性

メタフォリカル・コンピテンス（MC）についての研究が進んでいるが、はたして MC は学習者にとってどれほど重要な存在だろうか。

Low（1988）によると、メタファーは様々な言語活動と言語使用に大いに寄与でき、言語教育においてより重要視されるべきである。次に、Danesi（1992, 1995）、Danesi & Mollica（1998）、Kecskes & Papp（2000）などは、メタファー的にディスコースをプログラムするのは母語話者の基本的な特徴であるため、MC は母語話者と同等の目標言語を習得する際の鍵であると主張している。厳（2001）は、第二言語教育で様々な方法と工夫を通して学習者の MC を向上させると、外国語で書かれた文章への理解と記憶を効果的に促進できると述べている。胡（2004: 131）は「メタファー表現の出現と使用は自然言語によく見られる現象であり、MC 養成は既に第二言語教育において欠かせない一環となってきた」[2] と指摘している。また、王・李（2004）は、言語教育においては、言語能力とコミュニケーション能力と平行し、MC をも教育の重点に入れるべきだと主張している。Azuma（2004）も、言語教育におけるメタファーは学習者に言語体系の背後にある我々の概念体系の構造や機能を知る機会を提供し、言語の理解のみならず人間の心、身体と言語の関係に対する理解をも促進することができると述べている。更に、Littlemore & Low（2006）によれば、MC は学習者の文法能力、談話能力、語用能力、社会言語能力及びストラテジー能力に貢献でき、第二言語習得の初級から上級までの言語学習、指導法及びテストに深く関わっている。

以上から明らかなように、MC は言語習得に関する様々な面に寄与でき、その重要性はいくら強調しても強調しすぎることはない。

３．３．MC と概念的流暢性

メタフォリカル・コンピテンス（MC）と概念的流暢性（Conceptual Fluency、以降 CF）とは密接な関係にある。Danesi（1992）は、MC という概念を第二言語習得の研究領域に導入すると同時に、概念メタファー理論に基づき、概念的流暢性理論（CF 理論）を提唱している。彼によると、言語は概念体系によって成り立っているが故に、目標言語を完全にマスターするためには、その概念

体系に即してメタファー的な言語を理解、使用する能力、即ち MC を身につけねばならない。また、「メタファー的」に会話できるのは、母語話者の基本的な特徴であるため、MC はある言語をマスターしたかどうかを判断する重要な基準となり、学習者は母語話者が持つこのような MC を獲得すれば、CF に至れる。このように、Danesi（1992: 490）は、CF を「メタファー的な構造化に基づいて目標言語がそれに対応する概念体系をどのように反映し、エンコードするかを知る能力である」[3] と定義し、CF と MC をほぼ同一視している。

Danesi の CF 理論は、Kövecses & Szabó（1996）、Russo（1997: 130）、董･徐･梁（2003）、胡（2004: 83）、野呂（2006）、游（2009）、王･曹（2009）など、多くの学者の賛同を得ている。しかし、彼の「CF = MC」という考え方に対しては、一部の学者が異議を唱えている。例えば、Valeva（1996）によると、あらゆる概念はメタファー的なものであるわけではなく、その中の一部の文字通りの概念はメタファー的過程に関わらない。それゆえ、MC を CF の全部とみなしてはならないという。また、Kecskes（2000）は MC は CF の極めて重要な構成要素であるが、二者を簡単に同一視するのは間違っていると指摘している。

以上のような批判を考慮し、Danesi（2000）は、すべての概念はネットワークの形で存在しており、人間の頭の中には、外延的ネットワーク（denotative network）、内包的ネットワーク（connotative network）及びメタフォリカル・ネットワーク（metaphorical network）[4] という 3 つの主な概念体系がある、というネットワーク理論（network theory）を提出し、概念的流暢性（CF）の定義を「目標言語の深層的概念構造を、それを反映する表層的な文法や語彙と正しく結びつける能力」（Danesi 2000: 42）[5] と修正している。

このように、CF 理論は第二言語習得に大きな示唆を与えている。また、MC は CF の全部を代表できないが、それが CF の極めて重要な構成要素で母語話者の言語産出の基本的な特徴であることも明らかになった。

3．4．MC の測定

第二言語習得におけるメタフォリカル・コンピテンス（MC）の重要性が高まるにしたがい、MC の発達に関する考察は年々増えている。その中で、特に MC の構成要素と概念的流暢性（CF）の 2 つの視点からの考察が盛んである。前者は、MC の主な構成要素であるメタファー表現の識別力、理解力、産出力などの一部または全部に注目し、テストを作成して学習者の MC の発達状況について考察している。代表的な研究としては、Littlemore（2001）、Azuma（2004）、東（2006）などが挙げられる。[6] 後者は、CF の視点から、産出力に重点を置き、殆どが学習者の作文や発話の中のメタファー表現の使用頻度などについて分析し、MC についての測定を行っている。代表的な研究としては、Danesi（1992）、Russo（1997）などがある。[7] 他には、Hashemian & Nezhad（2006）のような両方の視点からの考察も存在する。以下では、各視点からの考察を順に見ていこう。

まず、構成要素の視点からの考察として、Littlemore（2001）は Gardner et al.（1974）、Pollio & Smith（1979）及び Katz et al.（1988）を参考に、(1) メタファー的な意味の識別力、及びその意味を識別する速度を測るテスト、(2) メタファー表現を理解する際の熟練度を測るテスト、(3) 新しいメタファー表現の産出力を測るテストの 3 つのテストを作成し、学習者の MC を総体的に測り、MC の各構成要素の相関関係についても考察した。Azuma（2004）と東（2006）は、英語のイディオム、諺、及びメタファー的な用法を持つ形容詞を材料に独自のテストを作成し、理解力と運用力という 2 つの面から日本語を母語とする英語学習者の MC を測った。また、MC の発達に影響する要因をも探った。その結果、学習者のメタファー表現の理解力は運用力より高いこと、語彙のサイズ、言語能力の融通性（多義語能力など）、文化的要素及び認知作用（類比推理など）が MC の発達に影

響を与える重要な要因であることなどが明らかになった。

次に、CF の視点からの MC の考察は、Danesi（1992）に始まった。彼は、2 つの実験を行った。1 つ目は、イタリア語学習者とイタリア語母語話者を対象に、選択肢問題、翻訳、口頭説明を通して目標言語にあるメタファー表現を理解できるかについて考察した。その結果、学習者はメタファー表現の翻訳において大きな困難を感じていることが分かった。2 つ目の実験では、スペイン語学習者とスペイン語母語話者を対象に、スペイン語で提示された 3 つのテーマのいずれかに基づいて作文を書かせ、集めた作文のメタファー密度（Metaphorical Density、以降 MD）[8] について調査した。その結果、3、4 年間の外国語の勉強を経ても、学習者はまだ目標言語の概念体系をあまり習得していないことが明らかになった。また、Russo（1997）は、イタリア語学習者を対象に、MD の角度から彼らが産出した作文と会話について分析した。それと同時に、学習者に、適切なものと不適切なものが混ざっているメタファー表現の文化的適切性について判断させ、目標言語における概念体系の習得程度についても調査した。結果としては、学習者のメタファー表現の産出力も目標言語における概念体系の習得程度もまだ母語話者より低いことが明らかになった。

最後に、Hashemian & Nezhad（2006）はメタファー表現の理解力と産出力、及び概念メタファーの理解力を測るテストを作り、英語学習者（大学の新入生 95 名、2 年生 92 名、3 年生 139 名、4 年生 90 名）の MC と CF の発達について考察した。Danesi（1992）と同様に、学習者の MC が足りなく、作文の MD も低いという結果を得た。

以上見てきたように、研究者は異なる視点から様々な測定法で MC について考察している。また、殆どの研究において、第二言語学習者は MC が不足しており、教師からの更なる指導が必要であることが示唆されている。

３．５．MC の養成

これまでの研究によると、従来の指導法による外国語教育を受けてきた第二言語学習者は、殆どメタフォリカル・コンピテンス（MC）が不足し、MC の養成が望まれる。では、MC という能力は果たして養成できるものか、また、どのように養成するのか、という問いに対し、まだ多いとはいえないが、メタファー理論を教育現場に活用し、学習者の MC の発達を促す研究が進んでいる。

まず、先駆的な研究としては、Kövecses & Szabó（1996）と Deignan, Gabrys & Solska（1997）が挙げられる。Kövecses & Szabó（1996）は学習者の MC 養成の具体的な方法を示した。彼らはまず“up”か“down”を含めた句動詞が使われている 20 の文を利用し、“up”と“down”が空欄になっている穴埋めテストを作り、30 名の受験者をそれぞれ 15 名からなる 2 組（A 組と B 組）に分けておいた。次に、A 組には暗記によって“up”か“down”を含めた句動詞を学習させたのに対し、B 組には方向付けのメタファー（HAPPY IS UP など）に関する解説を与えて学習させた。その後、2 組の受験者に穴埋めテストを受けさせた。その結果、B 組の正答率は A 組より高く、MC の養成はイディオムの学習を促すことが分かった。また、Deignan, Gabrys & Solska（1997）は、学習者に翻訳のタスクを完成するよう指示した。結果としては、外国語と母語におけるメタファー表現について討論、比較させるという指導法は、メタファー表現の理解と産出に効果的に寄与できると結論づけた。

その後、Boers（2000）、Danesi（2000: 162-163）、李（2004）、Hashemian & Nezhad（2006）、楊（2007）、劉（2007）、馮（2008）、趙（2009）、王（2009）、游（2009）なども、MC の養成法に関する実証研究を行ってきた。紙幅の関係上、ここでは、比較的参考になる次の 3 つの研究を検討する。

まず、Boers（2000）では、メタファー意識の向上法に関する 3 つの実験が報告されている。彼は英語学習者を統制群と実験群に分け、それぞれに対し従来の語彙指導法とメタファー意識の向上を

目指す指導法（概念メタファーのまとめと提示など）を実施したあと、語彙テストで学習者の語彙力の変化を測った。その結果、実験群で用いられた指導法はメタファー意識の向上や語彙力の発達に役立つことが明らかになった。

Danesi（2000: 162-163）は、イタリア語を教える 14 名の教育実習教師を 2 グループ（A、B）に等分し、トロント大学教育研究大学院の 2 クラス（a、b）の学習者を対象に、A グループの教師に従来の指導法を、B グループの教師に MC と CF を高めるための指導法を行わせた。3 週間の指導が終わった後、すべての学習者に同様なクローズテストを受けさせた。結果としては、a クラスの正解率はわずか 32.9% であるのに対し、b クラスの正解率は 89.9% にも至った。

また、Hashemian & Nezhad（2006）は、大学 3 年生の英語学習者を対象に、6 ヶ月にわたり、メタファー的な英語の習得を中心にした指導法を行った。指導内容としては、主に概念メタファーとメタファー表現とは何かについて説明したり、概念メタファーとそれに基づいたメタファー表現との関係などについて討論したり、また、学習者にメタファー表現で文を作らせたり、メタファー表現を作文や教室でのコミュニケーション活動に運用させたり、メタファー表現に関する穴埋め練習をさせたりした。その結果、学習者の CF と MC は大いに向上し、作文の MD も母語話者とほぼ同様になった。これは、教室でも CF と MC を養成できるということを示唆している。

このように、MC 養成の有効性と可能性は、Kövecses & Szabó（1996）、Deignan, Gabrys & Solska（1997）、Boers（2000）、Danesi（2000: 162-163）を初めとする様々な研究において示されている。

３．６．MC とそれに関連する変数との相関研究

メタフォリカル・コンピテンス（MC）とそれに関連する変数との相関研究は始まったが、まだ多いとは言えない。

まず、趙（2003）、呂（2004）、王謹（2006）[9] などは、相次いで MC と言語能力の相関について研究した。いずれの研究においても、英語学習者の MC と全体的な言語能力の間に正の相関が見られた。また、東（2006）でも、語彙力と MC の相関性はかなり高いことが示されている。

次に、Johnson & Rosano（1993）は MC と英語学習者の認知スタイル及びコミュニケーション能力の相関について考察した。彼らは、MC とコミュニケーション能力を測るタスク及び立方体組み合わせテスト（block designs test）[10] を用い、英語学習者の「場独立（field-Independence）」スタイルとメタファー表現を解釈する流暢性の間に負の相関、また、メタファー表現を解釈する流暢性とコミュニケーション能力の間に正の相関を見出した。

最後に、Littlemore（2001）は、MC とそれに関連する様々な変数との関係について詳細な考察を行った。その結果、(1) 包括的（holistic）スタイルの学習者は分析的（analytic）スタイルの学習者より全体的に MC 測定テストの得点が高いこと、(2) MC の 4 つの構成要素（オリジナルなメタファー表現の産出力、メタファー表現を理解する際の熟練度、メタファー的な意味の識別力、メタファー的な意味を識別する速度）とコミュニケーション能力の間に殆ど相関が見られないこと、(3) MC と学習者の性別及び外国語学習時間数の間に有意な相関がないことなどが分かった。

以上見てきたように、MC とそれに関連する変数との相関研究は、始まったばかりで、今後の更なる考察が期待される。

３．７．MC への母語転移の影響

メタフォリカル・コンピテンス（MC）の発達に対する母語転移の影響について分析を行った研究としては、管見の限り、まだ東（2009）しか挙げられない。

東（2009）はメタファー表現の理解への母語知識の影響について考察するため、日本人英語学習

者（147 名）と英語母語話者（100 名）を対象に、オリジナルな Metaphor-Cognition Test と面接調査を実施した。その結果、(1) 概念基盤・言語表現ともに共有の項目は正答率が高いこと、(2) 日本人英語学習者は日本語母語知識の、英語母語話者は英語母語知識の影響が特に顕著であること、(3) イメージのはっきりした表現は正答率が高いこと、ただし、母語知識の影響が見られること、(4) 全ての項目の理解に母語知識の利用が見られ、母語知識・スキーマが活性化されているが、これらには功罪両面[11]があることなどが明らかになった。

以上、MC の定義、重要性、測定法、養成法、MC と他の変数との相関関係及び MC への母語転移の影響などについての研究を概観してきた。学習者の MC 養成は重要かつ可能であることなどが明らかになった。また、これまで見てきた研究は、殆ど英語教育で行われたものであり、日本語学習者を対象とするものはまだ見られないという現状も分かった。

4．MC 研究における問題点

メタフォリカル･コンピテンス（MC）は言語学習の各方面に深く関わり、言語能力やコミュニケーション能力に加えて重要視されるようになった。それゆえ、MC についての研究も重要で有意義な課題だと考えられる。しかし、石・劉（2010）も述べているように、MC 研究に関しては、まだ多くの問題点が残っている。ここでは、石・劉（2010）を参考に、これまでの先行研究における主な問題点を次のようにまとめる。

(1) 考察対象の不十分さ

Lakoff & Johnson（1980）の概念メタファー理論が誕生して以来、メタファー表現の種類も数量も、従来より大幅に増えてきた。しかし、これまでの MC の構成要素の視点からの考察においては、Azuma（2004）と東（2006）はイディオムや諺を中心的な材料とし、その他の研究は殆ど伝統的なメタファー表現しか取り扱っておらず、様々な概念メタファー[12]による広範なメタファー表現の理解や産出については、まだ全面的には考察されていない。一方で、概念的流暢性（CF）の視点からの考察は、広範なメタファー表現全般について分析を進めているが、その殆どは作文や会話に重点を置き、メタファー表現の識別力や理解力よりも産出力に焦点を当てすぎる傾向がある。また、両方の視点から MC について調査した Hashemian & Nezhad（2006）の研究は、相対的に全面的な考察を行ったと言えるが、メタファー表現の識別力については触れなかった。このように、これまでの MC 研究は、殆どが学習者の MC の一部しか考察していないことが分かる。

(2) 測定法の未統一

前節でも少し触れたように、これまでの実験に用いられた MC の測定法はまだ統一されておらず、測定する要素も様々である。例えば、姜（2006）はメタファー的な語彙の産出力だけに注目しているのに対し、Trosborg（1985）、Littlemore（2001）、東（2006）などは産出力だけでなく、メタファー表現の識別力、理解力、更に使用嗜好などについても測定している。一方で、Danesi（1992）、Russo（1997）などは、MC の構成要素でなく、概念的流暢性（CF）の視点から、学習者の作文や会話のメタファー密度（MD）に焦点を当て、MC について考察している。また、Hashemian & Nezhad（2006）のような両方の視点からの考察も存在する。

(3) 相関研究の不十分さ

3.6 節でも見たように、MC とそれに関連する変数との相関研究は進んでいるが、まだ数量的にも少なく、研究方法と研究内容も統一性がない。また、MC と言語能力との関係については、ある程度明らかになったが、MC と、認知スタイル、コミュニケーション能力、性別、外国語

学習時間数などとの関係についての研究はあまり進んでいない。

(4) 母語転移研究の不足

認知言語学の観点によれば、身体を基盤として形成された各文化の概念構造には、異なる部分もあれば、重なる部分もある。それゆえ、MC という能力を論じるに当たっては、母語の概念体系からの影響を考えねばならない。にもかかわらず、これまでの MC 研究は、あまり母語転移の影響に関心を寄せていない。先行研究としても、管見の限りまだ東（2009）しかない。

5．日本語教育への MC 研究の導入

以上、メタフォリカル・コンピテンス（MC）研究の現状や問題点を見てきた。MC 研究は始まったばかりで、まだ多くの問題点があるが、MC が言語習得において大きな役割を果たしていることは、幅広く認められている。MC は日本語学習者にとっても極めて重要な能力であり、MC 研究は日本語教育にも多くの示唆をもたらしてくると考えられる。ここでは、これまでの MC 研究をもとに、次の図 1 に示している流れを経て MC 研究を日本語教育に導入することを提案したい。

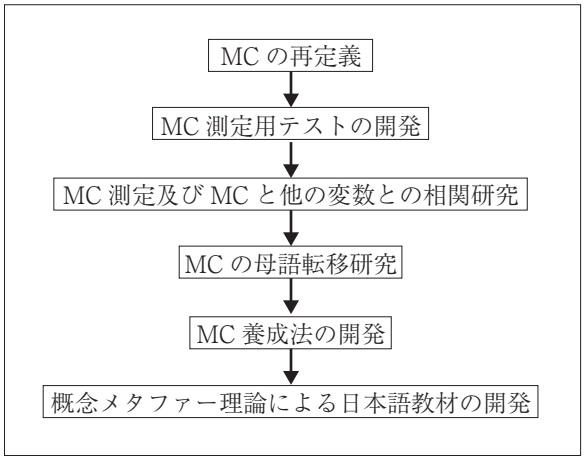

図 1　日本語教育への MC 研究導入の構想

(1) MC の再定義

MC を論じる際に、各種の概念メタファー（事態構造のメタファー、イメージ・スキーマのメタファー、構造のメタファーなど）に基づいた広範なメタファー表現を全部考慮に入れ、学習者の全面的な MC を考察する必要がある。そのため、日本語教育における MC 研究を始めるにあたり、まず現代の概念メタファー理論とこれまでの MC 研究を踏まえ、MC の再定義を行わねばならない。ここでは、次のような新しい定義を提案する。「MC とは、様々な概念メタファーに基づいたメタファー表現を識別・理解・産出する能力である。」

(2) MC 測定用テストの開発

MC の定義が決まったら、まず基礎研究として学習者の MC の発達状況を把握しておかねばならない。MC を考察するには、実施が容易で、妥当性と信頼性の備わったテストがいいと考えられる。即ち、日本語学習者向けの MC 測定用テストの開発が望ましい。開発の手順は次のように考えられる。まず、Danesi（1992）、Littlemore（2001）、姜（2006）、東（2006）などの手法を参考に、テストの枠組みを決める。次に、テストに適した日本語のメタファー表現を集め、

具体的な測定項目を作成する。最後に、パイロット・テストを実施し最も妥当性と信頼性に貢献できる項目を選び出し、MC 測定用テストを完成させる。

(3) MC 測定及び MC と他の変数との相関研究

開発された MC 測定用テストを利用して日本語学習者の MC 測定を行うことができる。また、王謹（2006）や Littlemore（2001）などを参考に、成績、話題に基づくタスク、埋没図形テストなどを用いて学習者の言語能力、コミュニケーション能力、認知スタイルなどを把握し、MC との相関についても考察できる。他には、MC と学習者の性別や学習時間数との関係についても分析する必要もあるのではないだろうか。

(4) MC の母語転移研究

第二言語習得にあたっては、母語転移の影響があると思われる。MC の発達も当然母語知識から影響を受けるわけである。今後、英語教育にせよ、日本語教育にせよ、学習者に適した MC 養成法を開発するためには、まず母語転移の影響に関する考察が必要不可欠で重要だと考えられる。

(5) MC 養成法の開発

日本語学習者の MC 発達の現状、MC と言語能力やコミュニケーション能力などとの相関、MC への母語転移の影響などを解明した後、具体的な MC 養成法を探索することに入る。現時点の案としては、王建卿（2006）や鞠（2009）などの理論的な論述に加え、Kövecses & Szabó（1996）、Boers（2000）、Hashemian & Nezhad（2006）などの実証研究を参考に、また、日本語教育の現状などをも考慮すれば、[13] 日本語学習者向けの MC 養成法を開発することが可能だと考えられる。

(6) 概念メタファー理論による日本語教材の開発

学習者の MC を根本的に向上させるためには、概念メタファー理論を日本語教材に応用することが期待される。董・徐・梁（2003）や Danesi（1992）が指摘しているように、既存の外国語教材は殆ど概念メタファーに触れず、メタファー密度（MD）も非常に低い。そのため、日本語教育での MC 養成にあたっても、やはり日本語教材への概念メタファーの内容の編入が大きな課題となると考えられる。これまで、学習者の MC 養成を考慮した外国語教材の作成については、まだあまり研究されていないが、沈（2001）や Low（1988）など、参考に値するものも存在している。これらの研究をふまえれば、概念メタファー理論を応用した日本語教材の開発も不可能ではないだろう。

6．終わりに

成人の英語母語話者は、週に大抵 10,000 ぐらいのメタファー表現を使い、また、その中の 3,000 ぐらいのものは新しいものである（Pollio et al. 1977: 8-9）。このように、メタファーは、既に我々の日常の営みのあらゆるところに浸透している（Lakoff & Johnson 1980: 3）。メタファーを無視するのは、母語話者の能力の極めて重要な部分を無視することに等しい（Danesi & Mollica 1998）。概念メタファー理論の発展とともに、外国語学習者のメタフォリカル・コンピテンス（MC）養成の重要性は高まりつつあり、第二言語教育に欠かせない一部となってきた。

しかし、MC 研究は日本語教育においてまだ見られない。本稿では、MC 研究の現状や問題点についてまとめたうえで、日本語教育への MC 研究の導入を提案した。MC 研究の道程はまだ先が長いが、今後、理論研究とともに実践的な応用研究の成果が蓄積されることによって、必ず花を開き実を結ぶ日が来ると確信している。

注

[1] 原文は次のとおりである。“The essence of metaphor is understanding and experiencing one kind of thing in terms of another.”(Lakoff & Johnson 1980: 5)

[2] 日本語訳は筆者によるものである。原文は次のとおりである。「隐喻的产生和使用是自然语言的常见现象。对隐喻能力的掌握已成为第二语言教学中不可缺少的环节。」(胡 2004: 131)

[3] 日本語訳は筆者によるものである。原文は次のとおりである。“To be conceptually fluent in a language is to know how that language reflects or encodes concepts on the basis of metaphorical structuring.”(Danesi 1992: 490)

[4] 外延的ネットワークは単語の最も基本的・具体的な意味からなっている。例えば、英語の“blue”が有する「青色」という基本義は、いくつかの接点を通して空や色などの関連する事物と一緒に、“blue”を中心とした外延的ネットワークをなしている。外延的ネットワークは、人間に具体的な事物について論述、思考する能力を与える。内包的ネットワークは主に伝統と文化を介して成り立っている。例えば、“I've got the blues.”の中の“blue”が有する「悲しさ」という意味はブルースの文化に関わっていると考えられる。また、メタフォリカル・ネットワークは具体的な概念を通して抽象的な概念を理解する役割を担う。例えば、“That hit me right out of the blue.”の中の“blue”は「意外」という意味を持つのは、人間の頭の中で“blue”と「青空」とが繋がっているためである。

[5] 日本語訳は筆者によるものである。原文は次のとおりである。“The ability to interrelate the underlying structure of concepts to the surface grammar and vocabulary that reflects them.”(Danesi 2000: 42)

[6] 他には、Trosborg(1985)、姜(2006)、丁(2007)なども構成要素の視点からMCの発達状況について考察し、学習者はMCが不足しているという結論に至った。

[7] 概念的流暢性(CF)の視点からの考察は、他にも、Kecskes & Papp(2000)、游(2009)などがあり、いずれもDanesi(1992)とほぼ同様の結果を得た。

[8] MDとは、メタファー表現を含めた文の数を総文数で割ってから100を掛けて得た値を指す。

[9] 著者名の姓と出版年の組み合わせで文献が特定できる場合は、本文では著者名のみを使用した。王謹(2006)と後述の王建卿(2006)についてのみ、本文中で区別するため姓名を表記した。

[10] 立方体組み合わせテストは、一定の制限時間内に、様々な色に塗り分けられた立方体を組み合わせて、要求された模様を作る課題である。

[11] 東(2009)では功罪両面があると述べているが、その詳細は示されていない。

[12] Lakoff & Johnson(1980)、Johnson(1987)、Lakoff & Turner(1989)、Lakoff(1993)、Grady(1997)、Lakoff & Johnson(1999)、Kövecses(2002)、高尾(2003)、谷口(2003)などでは、事態構造のメタファー、「存在の大連鎖」のメタファー、「出来事は行動」のメタファー、「一般性は特別性」のメタファー、イメージ・スキーマのメタファー、プライマリー・メタファー、複合的メタファー、構造のメタファー、方向付けのメタファー、存在のメタファー、イメージ・メタファー、慣例的メタファー、新しいメタファーなどの様々な概念メタファーが議論されている。

[13] 例えば、小浦方(2006: 110)は、「JSLの環境における日本語教育の場合、初級の学習者は理解できる語彙も限られているため、また、初級で出てくる語彙はイディオムが少なく、イディオムや慣用表現は中級以上のレベルから出てくることもあり、メタファー意識強化の指導を行うのは、中級以上の学習者が適していると考えられる」と述べている。したがって、日本語教育におけるMC養成法の開発にあたっては、現状の日本語教育の方法や学習者の学習レベルといった事象な

どをも考慮におかねばならない。

参考文献

東眞須美 .（2006）. メタフォリカル・コンピテンス（MC）の測定―MC と言語能力との相関性―. 日本認知言語学会論文集 , 6, 224-234.
東眞須美 .（2009）. 比喩的表現（英語）の解釈に及ぼす母語（日本語）知識の功・罪 . JACET 全国大会要綱 , 48, 257-258.
王寅 .（2007）. 認知語言学 . 上海外語教育出版社.
王寅・李弘 .（2004）. 語言能力、交際能力、隠喩能力「三合一」教学観 . 四川外語学院学報 , 20（6）, 140-143.
王暁磊 .（2009）. 隠喩理解能力与大学英語語彙教学 . 中国優秀碩士学位論文 . 華中師範大学 .
王謹 .（2006）. 中国英語専業学生的隠喩能力研究 . 中国優秀碩士学位論文 . 揚州大学 .
王建卿 .（2006）. 談英語学習者隠喩能力的培養 . 西安外国語学院学報 , 14（3）, 58-60.
王敏・曹揚波 .（2009）. 二語習得中的概念流利 . 湖南科技学院学報 , 30（6）, 168-172.
鞠晶 .（2009）. 高校英語専業学生隠喩能力的培養 . 黒竜江高教研究 , 6, 148-150.
姜孟 .（2006）. 英語専業学習者隠喩能力発展実証研究 . 国外外語教学 , 4, 27-34.
厳世清 .（2001）. 隠喩能力与外語教学 . 山東外語教学 , 2, 60-64.
小浦方理恵 .（2006）. メタファー意識の日本語教育への応用可能性 . 認知言語学的観点を生かした日本語教授法・教材開発研究 1 年次報告書（pp. 108-111）, 平成 17-19 年度 科学研究費補助金研究基盤研究（C）課題番号 17520253, 研究代表者：森山新.
胡壮麟 .（2004）. 認知隠喩学 . 北京 : 北京大学出版社 .
石磊・劉振前 .（2010）. 隠喩能力研究 : 現状与問題 . 外国語 , 33（3）, 10-16.
高尾享幸 .（2003）. メタファー表現の意味と概念化 . 松本曜（編）, 認知意味論（pp. 187-249）. 大修館書店 .
谷口一美 .（2003）. 認知意味論の新展開 : メタファーとメトニミー . 研究社.
丁川 .（2007）. 基于認知的中国英語学習者隠喩能力発展研究 . 中国優秀碩士学位論文 . 上海交通大学 .
趙明 .（2009）. 隠喩教学促進隠喩能力発展的実証研究 . 湘潭師範学院学報（社会科学版）, 31（6）, 184-186.
趙蓉 .（2003）. 隠喩能力和英語水平的相関性 . 中国優秀碩士学位論文 . 解放軍外国語学院 .
沈黎 .（2001）. 運用認知語言学理論編写教材練習 . 外語与外語教学 , 10, 47-49.
董宏楽・徐建・梁育全 .（2003）. 外語教学中的概念流利 . 外語教学与研究 , 35（2）, 140-144.
野呂健 .（2006）. メタファー能力（Metaphoric Competence）について . Walpurgis 2006（國學院大學文学部外国語文化学科紀要）, 19-40.
馮志国 .（2008）. 隠喩能力与外語教学的実証研究 . 中国優秀碩士学位論文 . 山東大学 .
籾山洋介 .（2010）. 認知言語学入門 . 研究社.
森山新 .（2007）. グローバル時代に求められる総合的日本語教育と認知言語学 . お茶の水女子大学比較日本学研究センター , 研究年報 , 3, 111-117.
游暁玲 .（2009）. 隠喩能力、概念流利和語言学習 . 江蘇外語教学研究 , 1, 44-47.
楊衛芳 .（2007）. 概念隠喩理論在英語詞彙教学中的応用研究 . 中国優秀碩士学位論文 . 南京師範大学 .
李清華 .（2004）. 隠喩対外語教学与外語学習的促進作用―対隠喩能力与概念流利的実証性研究―. 中国優秀碩士学位論文 . 華中師範大学 .

劉暢 .（2007）. 概念隠喩与中国英語教学 : 実証研究 . 中国優秀碩士学位論文 . 吉林大学 .

呂晶晶 .（2004）. 大学英語専業学生的隠喩能力探析 . 中国優秀碩士学位論文 . 大連海事大学 .

Azuma, M. (2004). *Metaphorical competence in an EFL context: the mental lexicon and metaphorical competence of Japanese EFL students.* PhD thesis, University of Nottingham.

Boers, F. (2000). Metaphor awareness and vocabulary retention. *Applied Linguistics, 21*, 553-571.

Danesi, M. (1992). Metaphorical competence in second language acquisition and second language teaching: the neglected dimension. In Alatis, James E. (Eds.), *Language Communication and Social Meaning* (pp. 489-500). Washington DC: Georgetown University Round Table on Language and Linguistics.

Danesi, M. (1995). Learning and teaching languages: The role of conceptual fluency. *International Journal of Applied Linguistics, 5*, 3-20.

Danesi, M. (2000). *Semiotics in Language Education*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Danesi, M., & Mollica, A. (1998). Conceptual fluency theory for second language teaching. *Mosaic, 5(2)*, 1-12.

Deignan, A., Gabrys, D., & Solska, A. (1997). Teaching English metaphors using cross-linguistic awareness-raising activities. *ELT Journal, 51*, 352-360.

Gardener, H., & Winner, E. (1978). The Development of Metaphorical Competence: Implications for Humanistic Disciplines. *Critical Inquiry (Special Issue on Metaphor), 5*, 123-141.

Gardner, H., Kircher, M., Winner, E., & Perkins, D. (1974). Children's metaphoric productions and preferences. *Journal of Child Language, 2,* 125-141.

Grady J. (1997). *Foundations of Meaning: Primary Metaphors and Primary Scenes*. PhD dissertation, University of California, Berkeley.

Hashemian, M., & Nezhad, M. R. T. (2006). The development of conceptual fluency & metaphorical competence in L2 learners. *Linguistic Online, 30 (1)*, 41-56.

Johnson, J., & Rosano, T. (1993). Relation of cognitive style to metaphor interpretation and second language proficiency. *Applied Psycholinguistics, 14*, 159-175.

Johnson, M.(1987). *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason.* Chicago and London: University of Chicago Press.（菅野盾樹・中村雅之（訳）.（1991）. 心の中の身体 : 想像力へのパラダイム変換 . 東京 : 紀伊国屋書店 .）

Katz, A. N., Paivio, A., Marschark, M., & Clark, J. M. (1988). Norms for 204 literary and 260 nonliterary metaphors on 10 psychological dimensions . *Metaphor and Symbolic Activity, 3*, 191-214 .

Kecskes, I. (2000). Conceptual fluency and the use of situation-bound utterances. *Links & Letter, 7*, 145-161.

Kecskes, I., & Papp, T. (2000). Metaphorical Competence in Trilingual Language Production. In J. Cenoz & U. Jessner (Eds.), *Acquisition of English as a Third Language* (pp. 99-120). Clevedon: Multilingual Matters.

Kövecses, Z. (2002). *Metaphor: A Practical Introduction*. Oxford: Oxford University Press.

Kövecses, Z., & Szabó, P. (1996). Idioms: a view from cognitive semantics. *Applied Linguistics, 17(3),* 326-355.

Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal About the Mind*. Chicago and London: University of Chicago Press.（池上嘉彦・河上誓作（訳）.（1993）. 認知意

味論―言語から見た人間の心 . 紀伊國屋書店 .）

Lakoff, G. (1993). The contemporary theory of metaphor. In A. Ortony (Ed.), *Metaphor and Thought* (pp. 202-251). Cambridge: Cambridge University Press.

Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago and London: University of Chicago Press.（渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸（訳）.（1986）. レトリックと人生 . 大修館書店 .）

Lakoff, G., & Johnson, M. (1999). *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought.* New York: Basic Books.（計見一雄（訳）.（2004）. 肉中の哲学 : 肉体を具有したマインドが西洋の思考に挑戦する . 哲学書房 .）

Lakoff, G., & Turner, M. (1989). *More Than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor.* Chicago: University of Chicago Press.

Littlemore, J. (2001). Metaphoric competence: A language learning strength of students with a holistic cognitive style. *TESOL Quarterly, 35,* 459-491.

Littlemore, J., & Low, G. (2006). Metaphoric competence and communicative language ability. *Applied Linguistics , 27*, 268-294.

Low, G. D. (1988). On teaching metaphor. *Applied Linguistic, 9*, 125-147.

Pollio, H. R., & Smith, M. K. (1979). Sense and nonsense in thinking about anomaly and metaphor. *Bulletin of the Psychonomic Society, 13*, 323-326.

Pollio, H. R., & Smith, M. K. (1980). Metaphoric competence and complex human problem solving. In R. P. Honeck & R. P. Hoffman (Eds.), *Cognition and figurative language* (pp. 365-392). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Pollio, H.R., Barlow, J.M., Fine, H.J., & Pollio, M.R. (1977). *Psychology and the poetics of growth*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.

Pollio, M., & Pickens, J. (1980). The developmental structure of figurative competence. In R. P. Honeck & R. P. Hoffman (Eds.), *Cognition and figurative language* (pp. 311-340). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Russo, G. A. (1997). *A Conceptual Fluency Framework for the Teaching of Italian as a Second Language*. Unpublished doctoral dissertation, University of Toronto .

Trosborg, A. (1985). Metaphoric productions and preferences in second language learners. In W. Paprotte & R. Dirven (Eds.), *The ubiquity of metaphor* (pp. 525-557). Amsterdam: Benjamins.

Valeva, G. (1996). On the notion of conceptual fluency in a second language. In A. Pavlenko & R. Salaberry (Eds.), *Cornell Working Papers in Linguistics 14* (pp. 22-38). Ithaca: Cornell University Press.

The Status Quo and Problems of the Research on Metaphorical Competence (MC) with a Proposal for its Introduction in Teaching Japanese

Yong ZHONG and Narahiko INOUE

Along with the development of Conceptual Metaphor Theory, the metaphorical competence (MC) of foreign language learners has been considered more and more important, and it has now become an indispensable segment of second language acquisition. However, the research on MC has not begun in the field of teaching Japanese. This article reviews the extant literature on MC to summarize the status quo and problems of the research on MC and then proposes an application of the research on MC in teaching Japanese.

Keywords
conceptual metaphor, metaphorical competence (MC), second language acquisition, teaching Japanese